

アンドレ・ジッドをめぐるエッセー I

——『新感情教育』草稿と『ブルターニュ紀行』をめぐる

鈴木 木 たけし

ジッドの幼少年期は暗い。あるいは暗いとされている。一九二六年、五十八歳ではじめて公表された自伝『一粒の麦もし死なざれば』には、暗く異常な幼児ジッドが描かれる。その後青春期、処女作『アンドレ・ワルテルの手記』では、結ばれぬ恋と宗教的苦悩の中、主人公は死ぬ。暗い青春期を想い起させる。

しかし、自伝には、彼の主張とはうらはらな正常な幼児も語られる。また短い草稿のみ遺る『新感情教育』、そして事実上の処女作『ブルターニュ紀行』(一八八九年)は、後の彼の諸作品をかいまみせると共に、健全な少年ジッドをみせる。だが、この二作についてのジッド

の言及はなぜか少ない。彼が創りあげようとする暗い少年のイメージに、これら二作品はそぐわないのかも知れない。一九九六年公開された一八八九年の日記とこの二作品を通して、その事実をさぐってみようと思う。

一、暗い子供

〈自伝にみられる暗い子供〉

スキヤンダルをおそれ、逡巡のうえ刊行された『一粒の麦』は、「真実でなければ存在理由のない」ものだった。その冒頭から、「暗い、醜い、陰険な」幼児が語ら

れる。

幼児の彼は、食堂の大きなテーブルの下に、同い年の門番の子ともぐり込む。女中が何をしているのかと聞くと、遊んでいるんだと答える。おもちゃをガチャガチャさせてごまかす。実は二人、それぞれ、いわゆる「悪戯」にふけていたのだ。

この話の後、ジッドはいう。

——全ての魂が透明、素朴な心、純粹そのものといわれるあの無邪気な年齢に、私のばあい、暗さ、醜くさ、陰険さをしか見出せないのだ。⁽¹⁾

また、リュクサンブール公園に女中につれられて行く時の事件。当時のブルジョワジー子弟の典型的光景だ。

父ポール・ジッドは、著名なパリ大学法学部教授だった。公園の北東、パンテオンに向う広場に面したメディティス街⁽²⁾に住んでいた。

公園でこの幼児は他の子と遊ばない。むっつりとして女中にしがみつき、他の子たちの遊びを見ている。彼ら

は、バケツで砂のパテの列をつくっていた。女中が目を離したとき、突然、彼は突進しパテを踏みにじった。確かに、この子は「陰険」だ。

さらにおぞましい思い出がある。彼の父方の郷里ユゼスで起きた事件。その土地にのこる町史⁽³⁾には、二人の名士の名がのっている。先のポール・ジッドとジッドの叔父シャルル・ジッドだ。後者は、農本主義の経済学者として知られる。街の中心地にシャルル・ジッド広場がある。ここでもジッド家は名家だ。

さて、年一回ユゼスに、ジッドの父方の祖母や親戚に会いに行くのが習慣だった。少し長いが、生々しいこの事件を思い起すため、『一粒の麦』の記述にそって行く。

——それはユゼスで起きた。そこに私たちは年一回、私の父の母といろいろな親戚に会うため出かけた。その中に、庭のある街なかの大きな古い家をもつフロア家のいとこたちもいた。

それは、このフロア家の邸宅で起った。

私のいとこの一人は、とてもきれいで、彼女自身も

それを意識していた。ヘアバンドで束ねた黒髪が整った横顔をひきたてていた。(私は、彼女の写真を見なおしてみた)、そしてあの輝く皮膚……私が彼女と会ったあの日、彼女は広く襟を開けたドレスを着ていた。

「あなたのいところにごあいさつをなさい」と母が言った……(私は四歳以上になっていないはず、多分五歳)、私は進みでた。フロー家の従姉妹は、かがんで自分の方へ私をひきよせたので、彼女の肩が露わに私の目に入った。この肉体の輝きの前で、私は、何とも言えぬめまいにとらわれた。私にさしだされた頬に私のくちびるをつけるかわりに、あの目くるめく肩に魅了され、歯でかみついてしまった。従姉妹は苦痛の叫びをあげ、私は恐怖の叫びをあげた。ついで、不快な味で口が一杯になり、つばをはいた。⁽⁴⁾

五歳の子が、何か性的な衝動でこのような行為をするだろうか。確かに五歳ごろから幼児は、男女の違いを意識しはじめる。ジッドは、この事件を母がくりかえし語ってくれた真実とわざわざつけ加えている。すると、母に

くりかえし語られることで、真実と離れた想像上の誇張が、ジッド自身の心のなかでつくりあげられることもありうる。

さらに、自己の写真について、執拗に暗い幼児の自分を強調する。

——私が今見ているあのころの写真には、母のスカートにしがみつき、縞模様のおかしな小さな服を着せられた、病弱で意地悪げな斜視の私がいる。⁽⁵⁾

遊びについても孤独な子供がくりかえし語られる。子につきまとわれ困る母が、いつもいう言葉は、「ピエールちゃんと遊びなさい」だった。それは、架空の子ピエールと遊ぶひとりあそびを意味した。彼は、ピエールと孤独なビー玉遊びに熱中したという。カレイド・スコープ(万華鏡)も彼の好んだ遊びだった。ひとり、微妙に華麗に変化する鏡による不思議な模様を長い時間楽しむ。最後には分解して、模様を形づくるものを他のものに変えて遊ぶ。

孤独な遊びについて、ジッドはつづけて言う。

——私の幼年時代の他の遊び、ジグソーパズル、写し絵、積み木など全て、孤独な遊びだった。^⑥

他の子供たちのつくった砂のパテを踏みにじる陰險な子、母のスカートにしがみつくと斜視の醜い子、ひとり遊びに熱中する孤独で暗い子、そしてなによりも、幼年期すでに自慰にふけり、美しい姪の肌にかみつくと異常な子が、たたみかけるように語られた。

〈自伝にみられる矛盾〉

はたしてジッドは、自身語るように異常な子であったのだろうか。

自伝の冒頭の「悪戯」のエピソードの前、まさしく作品の書き出しに父の思い出が語られる。リュクサンブール公園の北東口、現在の地下鉄リュクサンブール口の方に位置するメディチス街、正確にはエドモン・ロスタン広場に面するアパルトマンの上部階に、ジッド家は住ん

でいた。家のバルコニーから父が紙のドラゴンを飛ばし、それが広場の噴水の上をこえ、公園のマロニエの枝にひっかかる情景が語られる。数ページ後、母と対立する父の教育方針（子供をしつけるにあたって、充分説明し子を説得するべき）、紙を食う虫の穴が本の何ページまであいているのか調べる遊び、モリエール、オディッセイ、シンドバッドやアリババといった父の読んでくれる本、そして、サン・ミッシェル街から始まり、リュクサンブール公園の南端までの散歩など、父の思い出が懐かしげに語られる。十一歳のとき、その父を失なうとしても、幸福な幼年時代だ。母親の厳格なしつけがあったとしても、当時のヴィクトリア朝風ブルジョワ家庭の一つの雰囲気として、けっして異常なものではない。そのような家庭で安全で階級から出さない方法として、ひとり遊びは、まして一人っ子には、当然のことのように思われる。さて、ピエールとのひとり遊びでも、布製の大きな袋に入ったビー玉は、後に、それで遊ぶ現実の友達を見つけたときに使われたと語られている。孤独な遊びは一時期的ものようだ。カレイドスコープの遊びは、確かに

それを覗くのはひとりだが、この遊びを好んで彼と一所にしたいとこたちは、彼より辛抱強くなく、すぐに回して新たな模様を見ようとしたとのべられている。側にいとこたちがいた。孤独で暗く陰険で異常な子のかたわら、愛情につつまれて、安心できるいとこたちもそばにいる正常な子もいるのだろうか。

次の思い出は、少しも陰険ではない素直なやさしい子供を想像させる。姪の肌をかんだ件とあまりに対照的なので、少し長いが自伝の記述をおってみる。

——（女中の）マリーがリュクサンブル公園に連れて行ったとき、私は、同じ年の子供をみつけた。その子は、繊細でおとなしく静かな子だった。彼の病的に青白い顔は、厚い眼鏡でなかば隠されていた。眼鏡のレンズがひどく暗いので、その後にあるものを見わけることができなかった。……小さな白い羊の毛皮のコートのせいで、彼をムートンちゃんと言った。……（眼鏡をとってみてと言うと）彼は、おそろしげなめがねをはずした。たよりなくまばたきする哀れな目が、私

の心に悲痛に満ちて入りこんできた。

……私たちは、手に手をとって、黙って散歩をするほか、何もしなかったように記憶する。

この最初の友情は、少ししか続かなかった。ムートンちゃんは来なくなったのだ。ああ、何とそのとき、リュクサンブル公園が空虚に思われたことか。⁽⁷⁾

母と女中との会話を盗み聞いて、ジッドは、ムートンちゃんが、盲目になったことを知った。そのとき……

——私は、自分の部屋に行き泣いた。そして数日のあいだ、長いあいだ目を閉じたまま開かずに、家をさまよい歩き、ムートンちゃんがあわされている目を自分も感じようと努力した。⁽⁸⁾

彼は、やさしい子である。孤独が追いやる身勝手な思いやりのない子ではない。後述するジャン・ドレが指摘する、単なる均衡なのだろうか。クロード・マルタンは、よく知られる『ジッド自身によるジッド』で、姪をかみ

つく事件を語った後、この暗いジッドも確かなものかも知れないと述べながら、次のようにいう。

——……この誠実な物語（『一粒の麦もし死なずば』）を読むと、ジッドの子供時代は、孤独で不機嫌な顔そのものと私たちにはみえる。しかし私たちは、自分の楽しみするときには、遊び好きで好奇心の強い、衝動的で熱狂的なジッド、また、ノルマンディーやセヴェンヌ地方ですごす夏休みときには、光と幸福に酔うジッドを知っている。——要するに「正常な」子供を。……いろいろな事情、すなわち環境と教育が、平凡な多くの行為に、特異な面、悲劇的な様相をもつぱら与えた。ジッドは、ジッドとして生れたのではない。彼はジッドになったのだ。

この異常かも知れない、正常かも知れない子供が、後に作家ジッドとなる。この少年は、はたして正常にその後の思春期をおえるのだろうか。まさに思春期の終りである十九、二十歳のジッドをみてみよう。一八八九年、

二十歳のジッドは、事実上の処女作を発表し、まさしく作家ジッドとなる。

二、一八八九年、J・ドレー著『ジッドの青春』にならって

〈ドレー博士の壘みにならって〉

『ジッドの青春』¹⁰は、一九五六年に刊行された。著者は、精神医であるとともに、ジッドと親しい関係にあった。そのためもあって、膨大な未公開資料、聞き取り調査まで駆使し、全二巻、一二七二ページの伝記を完成した。一九〇二年の『インモラリスト』までの伝記だが、今まで謎めいたこの作家の青春時代を克明に描いた。残念ながら、その和訳は、全体の四分の一を残して未刊となっている。当時、まさしく遅い青春の唯中にいた私も、これをむさぼり読んだ。かたわらP・ラフィューのやはり膨大な『小説家ジッド』¹¹（一九五四年）があり、この作家はけっして煉獄になどいないと思った。

さて、精神病理学者であるドレーは、当然、ひとつの

傾向、あるいは専門的な解釈をもたざるを得ない。二十歳前後のジッドについて、この青春のある異常さを、現実に対する感覚が少ないことに収斂するよう描いたことだ。はたして、青春ジッドは、現実感覚が欠如しているのだろうか。

〈文学活動のはじまりとひろがり〉

一八八八年、ジッドとピエール・ルイは、哲学級に進んだ。二人は、すでに修辞学級のとき、作文「ジッド一番、ルイ二番⁽¹²⁾」という有名な逸話以来、親友となっていた。二人の通ったアルザス高校の哲学級はよくないとのこと、ジッドは、アンリIV世校に移った。ルイは、高級住宅地16区のパッシーに居をかえたので、新居近くのジャンソン・ド・サイイ校にかわった。二人は、セーヌ左岸と右岸に住むようになったが、「しばしば橋を渡って⁽¹³⁾」よく会った。サイイ校でルイは多くの文学仲間をもつ。後にジッドの妻の妹ジャンヌの婿となる秀才、マルセル・ド・ルーアン。ニヴェル出身で、後にジッドが『地の糧』をささげることになるモーリス・キヨ。後に

フラン・ノアンとなるルグラン。キヨとルグランは、ニヴェルで『中学生誌』を刊行、ジッドも寄稿者の一人として参加する。文学をめざす一群の中に、彼は身を投じた。

かたわら、この年は大学入学資格者試験、バツカロレア第二次の年だった。二ヶ月半、リッセに通っただけで、彼は、家庭教師、リオン先生につき、自宅で哲学を学ぶ。この先生の授業は、骨だけの無味乾燥なものだった。そんなジッドに哲学を目覚めさせたのは、ショーペンハウエルとなる。

〈ショーペンハウエルとフローベルを読みふける〉

たしかに、リオン先生の指導は、文学少年ジッドにとってつまらないものようだった。しかし、レジュメとディセルタションによるフランスの教育方法では、当然かも知れない。いずれにしろ、閉塞状態のジッドを救ったのは、ショーペンハウエルだった。この哲学者に耽溺していくジッドについては、ドレー博士の分析にそってみてみよう。

何故、ジッドが哲学に興味をもてなかったか。博士はこう説明する。

——それぞれの（哲学）体系が、ある哲学者の（個人の）性格の投影であり、哲学者は、自己の個人的問題にふさわしい解決を（一般の）人間の尺度にあわせ、はかろうとするのだと、ジッドに教えたら、哲学体系に彼がどれほど興味をもったかも知れないと思われる。⁽¹⁴⁾

さらに博士は、註で補足する。

——たとえば、彼の嫌ったカントの性格は、敬虔派の母の至上命令に絶対に服従することによって形づくられたこと、そして彼の好きなショーペンハウエルの性格が、子供時代からの母親との敵対関係に影響され形づくられたことを知っていたら。⁽¹⁵⁾

なぜ、彼はショーペンハウエルに興味をもったか。博士は推測する。

——ショーペンハウエルに本来そなわっている文学的魅力的他に、彼の代表的提言、「世界は、表象である」が、この若き詩人にとっても気に入られた。「生存意志」の苦行も、彼の理想にふさわしいものだった。この哲学が、多くの苦悩にみちた言葉でもってくりひろげるペシミスティックな人生分析、意志として全てが苦しみだという原世界の本質を解説しながら、その本質をのがれる方法としての芸術への讃歌、夢と現実の対立種の存続を拒む純潔の弁護、ニルヴァナに結ばれる禁欲主義の弁護……これら多くの主題が、当時のジッドの心の奥底に達した。この書物の中に、自分についての説明をいくつか見出せた。「戦慄・ショーダン」、苦悩、陶醉、そして、子供のころからいだいている「第二の現実」の感覚についての説明、音楽や詩への情熱についての説明。そして、ジッドの歴史への嫌悪までが説明されるのだ。⁽¹⁶⁾

そして、哲学のかたわら文学では、当時、最もジッドに影響を与えた作家は、フローベルである。ドレーは、

その影響をショーペンハウエルと対にして、こう語る。

——この年のあいだ、「変らず愛着をいだき続けた友」フローベルもなんども読みかえされた。クロワッセの孤独な作家の表面的なレアリスムの下に、根元的なロマン主義、ロマンチック・アイロニー、ペシミズム、全てが幻想であるという感覚をジッドは見つけていた。『感情教育』の作者の美学的影響と、『意志と表相の世界』の作者の哲学的影響が、ジッドにおいて結びついた。序々に彼は、『新感情教育』を夢みるようになった。その主人公はユグノー、ゲルマンそして形而上者のフレデリック・モローとなるはずだ。アルヌー夫人へのフレデリックのプラトニックラヴまでにいたって、この愛する女性を欲望の相手とできない奇妙な事は、ジッドに内密の共感を目覚めさせたろう。フローベルの文体に関しては、それこそ彼がまねようと当時望んだことだ。で、今でもものこっている『新感情教育』の草稿には、フローベルに親しい調子、諧調、調和、そして半過去がみいだされる⁽¹⁷⁾。

ドレーによれば、ショーペンハウエルもフローベルも、「夢と現実」の対立、「第二の現実」の感覚、「全てが幻想」であるという、いわば、現実感覚の喪失が強調されている。そして、ドレーの伝記のこの年、一八八九年の記述が終るころ、ブルターニュ旅行中の逸話が結論めいて披露される。

ジッドは、ドアルネ近郊で馬車に乗っていた。本を読んでいたが、突然、御者が台からすべり落ちるのに気付いた。

——私の本から目を上げると、もはや御者はいなかった。私が前にかがむと、彼は車の下を通過するところだった。私は手綱を取った……。しかしこのことを皆さんに話すのは、そのとき私の出会った奇妙な状態を思い出すからだ。単に私は、常軌を逸して興味をもった。より正確には、それをおもしろがった。……しかし、現実の外の光景のように、それに立ち会ったといえる。……私は、それを真面目にとらえられなかった。私は、まるで精神の完全な存在とひどく神経的な緊張

とで、神経過敏症のようにふるまっていた……しかし、おもしろい、単におもしろいスペクタクルのようなものの前にいた。なぜなら、当然の恐怖、真実の恐怖は、そのとき以来、不可能になったから。⁽⁸⁾

このドレーの引用は、日記、一九二四年十二月二十日のものだ。青春時代のジッドにいかにも現実感覚がなかったかを語るには、三十五年後の彼の思い出は、いささか遠い気がする。先のクロード・マルタンの言葉、「ジッドはジッドとして生れたのではない、彼はジッドになったのだ」を思い出す。

三、日記、一八八九年

ジャン・ドレーの伝記をみた後、『新感情教育』部分稿と『ブルターニュの旅』が書かれた一八八九年のジッドを日記を参照しながら、はたしてドレー博士のいうジッドがあらわれるかを追っていきたい。『日記、一八八九年』は、今まで発表されなかった。パリ、ジャック・ドゥー

セ図書館などに草稿が所蔵され、ドレー博士も未完の日記草稿を渉猟し、伝記を書き上げている。しかし、一九九六年、プレイアード版『日記』は、大増補を行ない、新版となった。そこには、この年の日記もはじめて公開された。

日記という性格を考えて、主題別に整理するより、日を追っていった方が、生々とした青春ジッドをみることができると思う。また公表されてまもないことと、むろん邦訳もないので、引用を長く細かくすることをおことわりする。

一八八九年、冒頭、日付けなしで読書録が掲げられる。ジッドはすでに、文学を生涯の糧とし、作家としての使命に目覚めている。あげられた作品は、時代背景があるとしても、モーパッサン一〇作品、ゾラ六作品、とりわけフローベル一〇作品となる。一九世紀レアリスム小説と一応分類される作家群である。その後、この年の日記中、フローベルへの言及が九回に及ぶことは、特筆すべきことだろう。

『中学生誌』に加わり、ピエール・ルイらと親交を深める作者の日記は、常に文学をめぐる記述が続く。かたわら青少年期固有の精神的な動揺、不安などが、心理的、文学的、哲学的分析をまじえ語られる。

二月二〇日、夢の記述。

——私の精神は、夜、過度に興奮し、夢があまりに強烈ではっきりとし、露骨になり、それで目覚めた後でさえも、現実の場が夢にとって代られる。

この晩では、たとえば、私がバツカロレア（第一次）試験を受けて、苦悩している夢をみた。私は全ての印象を……、現実のバツカロレア試験の感じより、ずっとはっきり覚えている。……ついには、幻覚があまり激しいので、起きてからも長いあいだ、その夢の方をほとんど信じていて、現実の方は全く思い出すことができなかつた。二月二〇日^⑨

この夢が現実となり代る話は、日記中の註では、頻出するテーヌの考えを踏襲していると説明される。しかし、

このような夢は、受験期の不安にさいなまれる少年には、ぼ共通なものだろう。数ヶ月後に二次試験がひかえていた。幻覚が現実をこえることは、本来繊細な文学少年のごくありふれた誇張でもあろう。

それから数日後、二月二十四日、二つ目の夢、というよりジッドの将来の夢が語られる。ピエール・ルイの夢と自分の夢を比較している。厳格さにおいては、プロテスタント的な、その夢の風物としては、カトリック修道院的な夢が語られる。カトリックもプロテスタントも渾然としたストイックな少年らしい夢だ。

——ルイの夢は、私の夢でない。もの憂い魅惑と楽しい仕事の混合は、私の好みといえないだろう。私は、仕事における厳格さを愛する。……

私は、二十三歳のとき、情熱が解放される歳に、激しいがうっとりさせられる苦行によって、情熱を抑制したいと思う。他の者たちが、舞踏会や祭りや安易な放蕩に走るのにたいして、人々とは違った快感、修道院の生活を生きる快感を見出したいと思う。それも一人

で、全く一人で、白衣のシャルトル会修道士と、何人かの苦行者に囲まれ、崇高で過酷な地の山中の唯中に引き籠もり、人を近づけない快感を見出したいと思う。二月二十四日⁽²⁰⁾

想に満ちあふれるようにみえるこの日記とはうらはらに、正確に微細な外界、現実の描写がみられる。それは『新感情教育』の断片にも、『ブルターニュの旅』にも通じてみられる描写だ。三月十五日の日記。

青年らしい孤高の闘いの夢が、その後も語られる。三月になると義姉マドレーヌへの愛と苦悩を告白、その中で、後に『アンドレ・ワルテルの手記』となる「アラン」が言及される。そこでは、常に、夢と現実の対立があらわれる。

——夢に私は悩む。夢が私の全ての力を弱らせる。そして夢のイメージが、私の目と現実のあいだに、常にわりこんでくる程、私を眩惑する。……
ああ、そのかたわらで、現実の人生は、色あせてみえる。——アラン、アラン、ぼくは、そのことを君に語らせる。三月⁽²¹⁾

夜、セーヌ河畔を散歩するジッドの記述には、夢や幻

——橋の上を通り過ぎるとき、私は、月が虹色に輝かせ、銀箔をきらめかしている細皮の立つ水面が輝いているのを見て、長い間、立ち止まった。私は、ちょっとやぶにらみでそれを見た。というのも、今や私は、色彩を見ることを会得していたから。そうすることで、色調のみをみる事ができるし、ぼんやりとした色調のハーモニーの中で、形そのものの意識を忘れられる。やがて、この水の流れ乱れる動きに茫然とし、魅せられたまま、身動きせずに視つづけ、ついには、私がどこにいるかも、もうわからなくなっていた。三月十五日⁽²²⁾

テーヌの『知性論』からの影響、前年のイギリス旅行の思い出などをプレイアード版の註は指摘しているが、⁽²³⁾

ジッド特有な、水を見つめる描写のひとつでもあろう。

三月十六日、芝居見物のとき、幕間に批評家たちを見る。若い文学少年の文学と作家への憧憬をあらわす一文。

——…ぼくは、ルコントゥ・ドウ・リールのまわりにできたグループの近くに、どうやら入り込むことができた。批評家たちがみないた。彼らの一人になること、彼らとつき会うこと、彼らと肩を並べて話すことへの巨大な熱狂、常軌を逸した欲望に私はとらわれた。⁽²⁴⁾

フローベル他の作家たちについて、いろいろ思いをめぐらした後、三月二十七日、少年らしい文学への勉強意欲が披露される。

——このようにフローベルは私を酔わせる。彼の手紙を読むと、旅をすること、未知の新しい感覚をおぼえること、土地といろいろなものを見ること、いろいろな外国語を知ること、とくに読むことの巨大な熱狂が私をとらえる。来年は、「知る」こと以外の他の事に

もうかまけたくない——ギリシア語、ドイツ語、ラテ

ン語、イタリア語、そしてとりわけフランス語を学ぶこと、あらゆる方法で持続して、書き、読み、観て、それを勉強すること。ぼくは、バルザック、ディッケンズ、スタンダールを知りたいと思う。三月二十七日⁽²⁵⁾ ミ・カレーム、四旬節第三木曜日に、ちゃめっけのある少年の空想がのべられる。これは、暗い青春ではなからう。

——…そうか、ルイ、きみは、きみの夢のひとつが女装してオペラ座に行くことだと言った。…まずぼくが希望するのは、二人でオペラ座ではなく、ヴェニスに行くことだ。きみは、コロンビヌになり、ぼくはアルルカンになり、陽気に青春に酔い、きみはできるだけ女らしい小さな女、できることなら短かいペチコート、大きな扇をもち、優美にしわしわとなった服を着ている。——ぼくは、人々を驚かす大胆でみだらなようすで、軽く優雅に。…(夜には)運河の水に反射

する赤いランプのきらめく大きなゴンドラに飛びのり……
四旬節第三木曜⁽²⁶⁾

そしてゴンドラの列は、音楽をかなで歌い、夜明けまで遊ぶ。終りは、こう結ばれる。

——多分、人生は、その詩の最も美しいものをぼくたちのためにとっておいている。

四月に入ると『新感情教育』を書こうと思う。すでにフローベルへの言及は七回目となる。⁽²⁷⁾ 四月一日、とりわけ『感情教育』について思いをはせる。

——フローベルがそれについて何と言ったかは知らない。しかし、『感情教育』はおそらく、この作品をさらに作り直すことも可能だろう。心の中に人工的にあらゆる感情を呼び起したいと思うある男の物語、これは、みみっちく、もの悲しいものだろうが、しかし、恐ろしいまでに教育的だ。四月一日⁽²⁸⁾

この年の三月五日に、この日記のなかで、義姉マドレーヌへの最初の愛の告白があらわれる。その後も、この若きジッドのマドレーヌについての、あるいは恋の苦悩の記述は、所々に散見される。そこには、しばし不可能な恋、結ばれぬ恋といった暗い記述も多い。しかし四月四日、いつかマドレーヌとサロンを開く、明るく、かつ現実的な夢が語られる。これと比べると、「人工的に……感情を呼び起したい」、とりわけ、恋の苦悩を呼び起したい男とこのジッド少年をとらえることもできるだろう。

——幾度となく胸にあたためられたぼくの夢のひとつ、それもあまり生々としているので、しばしば、それが現実の事であるように思われてしまう。愛しいマドレーヌとぼくがいとなむサロン。そこでのおしゃべりはすばらしい。あらゆる芸術家がこのサロンを訪れる。まづ、かわらずピエール・ルイ、アンドレ・ヴァルクネルも来てほしいな。そこで魅力あふれるマドレーヌは、おしゃべりを活気づけに皆のところをまわる。でも、軽くさわやかに。皆、全てを知っていて遅れていない。

だからそこでは、文学へのとても強い刺激がえられるだろう。四月四日⁽²⁸⁾

四月八日、『新感情教育』を書き出そうとする。

——そうだ、『感情教育』は、新たに創ることができ
る。——もうちょっとで、それにとりかかれるだろう、
数ページは書けるだろう……。一晩かけてユゼスで書
きたい。フローベルが書簡で書いているように。「私
は、無限に夢みる力強さのなかで、一夜を過ごした。」
四月八日⁽²⁹⁾

そして、書かれた草稿についての言及と思える日記が、
さらに四月八日にある。

——ぼくは、何ページかを読み直したとき、書いてし
まったことを後悔した。ぼくを満足させてくれるある
形式などより、何も言わないことを学ぶべきだ。ユゼ
スで練り直そう。ほんの少し、数ページだけ書こう。

けれど、ぼくに心持よい感情については、完璧に書こ
う。震えるような文章をつくりたい。たとえば、夕暮
れがきて、風が立ちだすときの、川岸の柳の葉のよう
に、静かにつぶやく言葉のささやきをつくりたい。夢
の中のようにぼんやりとしか思い出せない、眠った
声に似る奇妙な音調の、夢の神秘によって、見知らぬ
人の喪に落とされるふるえる涙のような奇妙な音調の
文章をつくりたい。四月八日⁽³⁰⁾

散文を書き始め、このような文体化について、彼は考
えはじめる。一週間程たった四月十四日には、文体化に
ついて様々に考える。

——ぼくは、感情が自分を感動させた時に、それを記
述することをやめた。精神が感動を分析する時には、
精神は感動でぼうっとしているから。その魅力は終っ
ているからだ。それを文章にするためには、それを享
受し、後に、創作力がそれを完全に移し換え、その陶
酔を呼び覚まそうという願望で強化された感覚の中に

浸りきる必要がある。四月十四日⁽³¹⁾

ついで四月二十七日、さらに、感情を文章化する方法について、思考をめぐらす。

——それだけで十分とぼくは感じる。ぼくの感情をぼくの記憶の中につっこんでおく、それを大切にして、時が来たとき文章化するためだ。目の前の感情の下ではよく書けはしない。創作は、夜一人こもってするべきだ。周囲の物事がうす暗がりでも、暗闇の奥底に光る形を目が認識するからだ。形を創作力が再生するからだ。四月二十七日⁽³²⁾

十日程後、演劇について語られた後、かわらず文体化についての方法論が続く。

——ぼくは、最も馬鹿げて信じがたい幻想的作品にとりかかる。そして、それを真実の人工的色調で彩る。現実の人生にいる人物などは、その全体を記述する

には、まったく面白くない。人物を剪定して、他の人間と共通しているものを彼から取り除き、そうすることで理想的人間の典型をつくる必要がある。

テーヌはいう。「芸術作品は、現実の事物がつくる以上に、完璧で明確な、本質的で際立ったある性格を表現するのを目的とする。そのためには、芸術家は、この性格の観念を自らつくり、その観念に従い現実の対象物を変貌させるのだ。」(テーヌ、『芸術における理想について』五月八日⁽³³⁾)

このテーヌの考えを、批判しているか、あるいは追隨しているのか、少しおいて、次の一文が続く。

——あらゆる感動をいだけつつ芸術家になることを考えている男、そして彼は、恋とは何かを知るために恋をしている(つくりもの)男となる。夜、彼は自分の感情を詳しく語る。次いで彼の恋がとても凡庸だとわかり、(あいかわらずつくりごとだが)疑いの感情を起したいと思い、恋人の誠実を疑がう想像上の問題

を創り出す。自らの意に反して、その疑いを信じるよう努力する——とうとう彼は、嫉妬の感情をいだきたいと思い、過度に自分が裏切られたようにしくみ、オセロになったと感ずるなどと続く。

この男についてあざけり、茶化さねばならない。というのも、彼の心の中の全ては、彼の意志で人工的につくられたものだから。(彼は「どんな感情を私はいだいたか」ではなく、「どんな感情をいだくべきか」と言う。)⁽³⁴⁾五月八日

翌日、五月九日。『アンドレ・ワルテルの手記』では、主人公ワルテルは死ぬ。しかし当初は、主人公を自殺させる考えではなかったことが記されている。

——……(物語の)終りで、活動的で現実的な人生がもっぱらよいもので、だから、彼自身で呼びよせた夢からようやく離れるよう、私は、彼と一緒に闘かうことに感動している。彼を陶醉させる夢が、魂をあまりに甘美につつむので、彼は、それがなくてはいられない

くなっていたのだ。……だから、神秘主義から離れて、平凡な人生にもどるか、あるいは、熱狂的な隣人愛にむかうか。五月九日⁽³⁵⁾

今までの文文化の方法論、あるいは夢の現実に対する優位とはうらはらに、結論は現実に立ちもどるようだ。他方、それから数日、死までにおわす、陰鬱な日々の記述が続く。

——ぼくは、すでに死んでいると自分で思う。一日中、霧の中を歩んでいるようだ。ぼくの力が死んだことに涙を流し、自分自身のために喪に服す。五月二十日⁽³⁶⁾

ほんの四日前まで、「日々せまりくる喪のように」悲しんでいた彼は、五月二十四日、突然、元気になる。ここでは少年らしい夢と現実のとらえかたがみられる。

——そして今やすでに、最初の勝利の誇りの中で頭をすっとあげる。四日間だけだった、そしてもう再び、

全ての夢、全ての熱狂的な野心、あらゆる希望が生れる。

そして、ほとんど実際に生きられたといえる幻想のなかに、来るべき日々が、たとえあるときは悲しく、あるときはすばらしいとしても、私の目の前、まぶしい光の中、一枚一枚めくられる日めくりのページのように、過ぎ行くのが見える。ああ／＼しばしば、いやほとんどいつも、すばらしい、というのも悲しみ自体、私には偉大な創造力をもつものに見えるから。

あらかじめ、ぼくは人生を生きている。ぼくの夢から目覚めたとき、人生が夢であり、夢が人生であるとぼくは信じる。五月二十四日³⁷⁾

元氣をとりもどし、五月二十六日には、『(新)感情教育』と『アンドレ・ワルテル』の構想を記す。

——空虚を感じる魂の荒廃を描くことは、すごいではないか。魂は空虚だが、その欲望は無限だ、弱点でもあるが。奇異なことだ、ディレッタントイスマで洗練

された感覚を、魂に目覚めさせた数冊の読書の後で、魂は、人生におけるいろいろな感覚を感じた。しかし、魂が感じふるえ動くためには、外界の物事とたたかい、外から刺激されることが必要なのだ。それに気付いた魂は、ひどく苦悩することになるだろう。

これこそが、他方、ぼくの『感情教育』の全てなのだ。……今や、デッサンはできている。魅力的で甘美だが、つくりごとの興奮によって乾きしなびた魂の苦悶の中での悲しみを語る。その形がとりわけ見える。

どのようにそれが書かれるかを語れるだろう。……ああ／＼その全てが見える、今こそ書きはじめたい。五月二十六日³⁸⁾

六月に入り、文学の勉強は進む。ヴァカンスに近づき、休暇に持って行く本のリストがつくられる。そして、哲学級バツカロレアに落ちた。十月の試験で合格することになる。彼の名誉のためか、新プレイアード版日記註には、その試験問題が記されている。これを見ると、あまりにも当時ジッドが興味をもち勉強していたことから、

かけ離れた問題であることがわかる。

——次のベーコンの言葉を説明しなさい。

「人間の力は、彼の科学の理性のなかにある。人間は、それに従がいつつ、自然に勝つ。」

例を引用すること。⁽³⁹⁾

そして七月八日、高らかにジッド少年は宣言する。

——一八八九年七月八日、子供の時代の終り。私の人生が始まる、今日から。

七月二十日、いよいよブルターニュへの旅立ちの前日の夜、彼はロワイヤル橋で、子供がセーヌに落ち、みつからないというニュースを知り、その橋に行った。

——三十分後、私はそこを通った。夜の帳は落ちていた。暗闇が船と岸の斜面の真中に満ちていた。岸辺に降りた、目の前には、静かな薄暗がりの中の大きな洗

濯場、さらにたくさん水、音は聞こえるがほとんど見えない水、なぜってすでに全ては暗いから。水は、棧橋の板にぴたぴた音をたて、神秘的だ。そして、これは不吉だ。この暗闇の穴の中を漕がれる船、その中に、ぼんやりとした二人の影が、長いこと、かき竿で洗濯場の下を捜している。

その上を車が笑いに満ちて、通って行った。⁽⁴⁰⁾

フローベルそのものの文体で、旅立つ前日は、書かれている。

四、『新感情教育』部分稿

『ブルターニュの旅』に先立ち、日記でみたジッド少年のどう書くかという方法論をめくりながら、『新感情教育』部分稿をまざまざみたい。

すでに日記一八八九年四月一日に、『新感情教育論』が言及されていた。四月八日、書き始める。しかし数ページを書き、読み直し、彼はすぐに後悔した。その後、四

月十四日、四月二十七日、五月八日と、書くことについての彼自身の理想と困難について、実に様々と彼は思いをめぐらす。しかし、五月九日、『アンドレ・ワルテル』の主人公への言及以後、五月二十六日来、彼の『感情教育』について語られることがない。後に、『アンドレ・ワルテルの手記』は完成するが、この作品については、部分稿、わずか二ページが、NRF版全集、第一巻冒頭におさめられているだけだ。日記プレイアード新版では、この年の補遺のような『断片』⁽⁴⁾という章にみられる。一八八九年にこの二ページが書かれたことは確かだが、他に稿はみつからない。

さて、この年の日記を通して、当時のジッドの芸術論を整理してみよう。彼はいったい文体化について、どのような理想をもち、どのような困難に苦闘していたかをさぐってみたい。

二月二十日には、バックカロレア試験の夢について、現実に対し、夢、幻想、非現実が優っていることを記す。夢が現実になり代るのだ。その記憶も、現実から受けた感覚の理性化を記憶だという。二月二十四日にも、夢が

現実にわりこんでくると、夢と現実との対立を語る。夢のかたわら、現実の人生は色あせる。

四月一日、『新感情教育』を書こうと思う。テーマは「心の中に、人工的にあらゆる感情を呼び起したいと思うある男の物語」だ。

四月四日、三月五日のマドレーヌへの愛の告白に次いで、彼女とのサロンについての現実的な夢が語られる。しかし変わらず、「……ぼくの夢のひとつ、それもあまり生々としているので……現実の事であるかのように思われる」と、夢と現実を対比している。まずは、夢と現実の対立がある。次いで、その文体化のために、様々な方法論を展開するが難しい、というより混乱する。

四月八日、『新感情教育』を書き始めようとする。書き出したが不満に思う。彼が理想とする文体とは、「震えるような文章」、「自然のつぶやく言葉のささやきの文章」、「夢の中のような、ぼんやりねむったような音調の文章」、「夢の神秘によって、ひとの喪に落すふるえるような音調の文章」となる。いずれも明確には出来難い文体化ととれる。

さらに、文体化について悩みはじめる。主なるテーマは、感情の文体化。

四月十四日、精神は感情を分析することで、感情そのものの魅力を失わせる。感情の文体化を理性ができないとのことだろう。

四月二十七日、その解決策として、感情を記憶し、後で、時が来たとき文章化しようと思はる。二月二十日とほぼ同じ論となる。

五月八日、今度は人間を描く方法について考える。テーマにならない、芸術による文体化は、現実の対象を変貌させること。人物の全体を描くのではなく、剪定をし、他と共通しているものを除き、理想的人間の典型をつくるという。

そして同日、感情との関わりをめぐる人間、「心の中の全ては、彼の意志により、人工的なつくりもの」となる人間、「どんな感情を私はいだいたか」ではなく、「どんな感情をいだくべきか」という人間を書こうと思う。

この論は、四月一日の「人工的に感情を呼び起したい男の物語」にもどる。日記でみるかぎり、若きジッドの文

体化の方法論は、感情、感性の文体化の方法と、人工的な感情をもつ人間を描こうとする方法をめぐって、手探りをし、考えるが、結論にいたらず、堂々巡りをするようだ。

七月二十日のブルターニュへの旅立ち前日の夜、セーヌ河畔に立ち見た光景の描写は、彼のくるくるまわる混乱した文体化への論とうらはらに、フローベル的すぎる。フローベルそのものの文体となる。

そして日記とは別に、『断章』の中で、彼は、『感情教育』のためにという一文をのせている。日記に苦闘して描かれた文体化が、整理されているかにみえる。

——ここに『感情教育』のために

そこでぼくは、非常にすぐれた知性にあふれる能力をもって生れた一人の若者の人生について言いたい。

次々と感じられた感覚を集めることによって、「私」が「豊かになること」を示すことは、まさに示唆に富んだ研究だ。次いで、これは魅力的な文体の遊びだ。

これらの感覚を描き、まだとても柔軟な、非人称のよ
うな私の成長のなかでの感覚の役割を描くことは、私
の興味をそそる。

しかしながら、感覚がとぎすまされるかたわら、読
書というものがやってくる。読書は、まだ若い精神に、
ほとんど思いがけぬ大きな明るい陽光を突然さしこむ。
この瞬間に、彼はもう感覚に身をまかせるのではなく、
それを探究しだすのだ。

……感覚をうけとる器官が、完璧になりうることを、
彼はぼんやりと疑いだす。そのときから、彼の感覚を
比較し、検証し、そうすることで繊細の進展をもとめ
る。そうすることで、彼は新しい物事を感じようと努
める。読んだ後で色彩を、——ボードレールを読んだ
後で香りを、のように……

少しづつ彼は、感覚と知性の与えるものでしか生き
ないようになる。そこで、人生について考えると、唯
ひとつのことが望ましくみえてくる。すなわち感覚に
ついて思索し、かつそれを称えらるとみえるもの、「書
くこと」である。⁽⁴²⁾

次に、書くことの難しさについて長く述べられ……

——彼は、感覚の瞬間に書こうと努力する。しかし、
観察されることで、感覚は消えてゆく。感覚を享受す
ることとそれを書くために観察することのあいだで引
裂かれ、彼の注意力は、その両方に対して無力となっ
てしまう。……⁽⁴²⁾

ここで、フローベルへの言及と、その影響をうけた彼
の論が展開される。

——フローベルをまねた後で、思想のないデカダンに
なって、ぼくはそれを示すことになる。ぼくは、彼
の言葉の、のがれやすいリズムの、響きの追求を示す
だろう。

ついには、枯渇を感じる絶望を語ることになる。そ
して恐ろしいことには、心もまた枯渇するからだ。
というのは、私たちの心の感性の大部分が、ほとん
ど全てが、他者の不幸と苦悩を表現し、想像すること

のたやすさからきているからだ。だんだんに、他人の苦悩が彼を無感動なものにする。彼のエゴティズムが、いつも彼の感情を抑圧し、彼の心をとて冷めたいものにするので、それに対し、懸命にたたかうがせんかたない。彼は感じることで興奮するように、愛することで夢中になろうと努める。しかし感覚のようには、心は導かれない。彼が落ちいる愛せないという大きな不安、それは、彼が待ち望む愛(恋)が自然に生れる開花をさまたげる。彼は、恐ろしいまでに、それに苦しむ⁽⁴²⁾。

やはり、感覚の文体化の苦悩である。そこにフロベールが影響する。むしろ、言葉の追求は、無感動を導き、感覚や感情は消えていく。そしてやはり、結論はない。ただ、『新感情教育』は二ページでも書かれた。邦訳もなく、知られていないので、全文をおく。

『新感情教育』部分稿

暑さのひどいとき、彼は、河までおりて行くのが好きだった。水の涼しさが彼を誘うのだ。彼はある場所を知っていた。そこは、彼だけが知っていると思っていた所。そこでは、底の砂を日の光が金色に染める上、水が、とても涼しげに、澄みきって流れていた。河をおおうハシバミの上から、あるとてつもない神秘的なものがふりそそいでいた。ごく静かに近づいた彼には、何か隠された秘密の場所、花や蝶の恋の場か、もしかしたら、小枝の下で全裸で水浴するひとりの木の精(マハドリユアス)を不意にびっくりさせたのかも知れないように思えた。彼が近づいたとき、歌うのをやめていたし、足音は湿った苔の上でかき消されていたが、ささやくような音はおわり、全てが逃げ去ったようだ。神秘の呪縛はとかれた。

そこで、彼はすわった、そしてゆっくりと衣服をぬぎおとした。それから、深い水の中に音もたてずにす

べりおりた。水は、ほとんどさざなみもたてず、快い冷めたさで彼の体を浸していた。鳥たちは、葉陰でおしゃべりをし、離れた枝のあいだから太陽が、ふるえる光をそそぎ、光は、水や砂の上で散り散りに折れくだけ、まるで笑っているようだった。

さざなみのおおそう快いけだるさに酔い、彼は泳ぐこともせずに、長いあいだそうしていた。彼は、この平和な自然の中で、裸でいる自分を見て享しんでいた。そして砂の上のぼって、太陽が湿めった彼の体を干すままにした。体の水気は、こまかい蒸気となりきえていった。彼は、水滴となれたらと思った。微細な水蒸気のように散り散りになり、光とそよ風の中に消え失せ、そして夜は、露となり、つるにちそうの花びらを湿めらせたいと思った。⁽⁴³⁾

ジッドに親しい場面が、このわずか二ページの中にいくつか登場する。衣服をぬぎ、冷めたい泉のなかに身を浸す。これは、後に『インモラリスト』で、病の癒えた主人公ミッシェルが泉に入る情景と重なる。自分の裸体

をみつめることは、『アンドレ・ワルテルの手記』、『ナルシス論』と続くジッドのナルシスムの発芽だろう。水滴になり変り、消え失せる。この物になり変り、自己を喪失するテーマは、『地の糧』で高らかに詩われることになる。一九三五年のジッド全集序では、この部分稿は『地の糧』の可能性をかいまみせるとある。⁽⁴⁴⁾そして「つるにち草』は『パリュード』の鍵となる語だ。

フローベルの文体の影響は、動詞半過去時制の駆使に色濃くあらわれている。ジャン・ドレーの指摘によれば、「フローベルに親しい調子、諧調、調和そして半過去がみられる。」彼は更につづける。「この表面的レアリスムは、必ずしも幻想的ではない。『アンドレ・ワルテルの手記』では、(新感情教育と違って)なによりも「彼」と言うのをやめ、「私」と言うように変っていた。」

一八八九年、哲学級のジッドは、フローベルの影響を強くうけ、その文体は、いたるところでレアリスムであり、時代における健全な文体をとっていたといえようか。

五、『ブルターニュの旅』

〈ブルターニュの旅をめぐる〉

ブルターニュの旅には、ひとつのエピソードがある。自伝『一粒の麦もし死なずば』⁴⁵で語られている。

一八八九年七月二十一日、日記にあるよう、ジッドはブルターニュに旅立った。しかし当初、母親は息子の一人旅を危ぶむのだ。スイスに、それもアルペン・クラブに参加し、団体旅行をさせようとした。リュックを背に、自由気ままに旅をしようとしたジッドと真っ向から対立した。アルベール・デマレが仲介し、母を説得した。しぶしぶ彼女は同意したが、二、三日に一度、後から息子を追う母親に会うという条件をつけた。当時のフランス、ブルジョワジーの家庭、それも一人息子ということで、さして奇妙な事ではないと私は思う。

さて、なぜブルターニュへ行こうと思ったのだろうか。ジャン・ドレーの指摘によれば、ジッドは当時、「できることなら、ブルターニュのロックマリアケルで、信

仰心の厚い母親の子として生れたかった」といつている。それ以外にブルターニュは、彼の好んだ神秘と伝説に満ち、夜になるや妖精たちがかけめぐる世界だ。さらにこの土地は、パリとは異質な歴史と性格をもつ。ゲートやショーペンハウエル、そしてプロテスタンティズムの影響をうけた少年ジッドにとって、これもこの土地に魅かれる理由かも知れない。

ジャック・ブスー著、『フランス・風土と生活』⁴⁶にならい、この土地をみてみよう。

ブルターニュはアルコート（森の国）とアルモール（海の国）とに分れる。

アルコート（森の国）

ブルターニュ半島の内陸部の陥没地帯では風がほとんどなく、木は自由に育つ。そこは、シャトーブリアンの歌う深い森、さらに古くは、この地方の伝説の魔法使いや、超自然的な生き物がたくさん住む深い森になる。

逆に、土地が高くなるとたちまち風の力で木の成長を抑えられ、荒野が広がる。明るい色のエニシダやヒース

しか育たない。このような土地は、風と羊の領分。そしてまばらな人家は、土地の起伏の中にかくれているように見える。ブルターニュの生活の中で、荒野は全く別世界を作っている。それは、神秘と伝説に満ち、夜になるやいなや、妖精たちがかけめぐる世界だ。

アルモール（海の国）

ブルターニュ半島は、伝統的に北、西、南の三つの海岸に区分される。それぞれが、地形、風景、さらに気候によって、特徴のはっきりとした領域を成している。

北側の海岸には、深くえぐられた高い断崖と、岩が崩れてできた大きな湾がある。南側の海岸では、断崖は低く、分岐した広い湾が数多くある。モルビアン湾や、細長い半島と沖の多数の小島に囲まれたキブロン湾などだ。西側の海岸では、鋸歯状に切り込まれた、最も複雑な湾が見られ、ゆがんだ形の岬がいくつも沖に向かって突き出ている。

南海岸のモルビアン湾は、特異な風景をもつ。この湾は、微妙な色の霧に包まれ、松の木が繁るたくさんの島

を浮かべている。深く切り込んだ湾で、フランスの中では、日本の瀬戸内海や松島湾に似ている。

西海岸、ここも特異だ。険しい崖のそそり立つ下に、一年中荒波が逆巻き、沖には小さな島や暗礁が散在する。ブルターニュ西部は、この地方の感情面での心臓部、すなわち、ブルターニュ語を話す、まさしくブルターニュと呼ばれるべき所だ。人々は自分達の特異性に忠実に生きていく。自己主義、言葉、風変りな家具（カーテン付き箱型寝台など）、服装（特色あるレースの婦人帽）などがここでは守られている。中央部の荒野をはさんで、ブルターニュの他の地域から切り離れ、この西部は、純粹なケルト文化の「島」、フランス文化から感情的に遠く離れ、自分の内部に目を向けて生きている島といえる。このパリに対する不信と反感は、後のジッドに通ずる第一歩といえよう。

『ブルターニュの旅』は、邦訳も、戦前からの『ジッド全集』に収められただけで、フランスでも、全集にあるだけだ。その故と、作品について私の考えることが、その過程を生んだ作品そのものから、なるたけ離れず語

りたい故、引用が長くなりうっとおしい思いをさせることをあえておゆるしいたきたい。

〈『ブルターニュの旅』部分私訳とノート〉

ジッドは、カンペールを六時に発つ。旅のはじまりだ。車中から見られる瞬間に過ぎ去る風景がすなおに描写される。

——遠ざかるイメージの印象……、列車の窓から電信柱が落下するように瞬時にすぎさる間から、次から次へと押し寄せる景色の過ぎ去るのを眺めた後のようなめまい、まるで過去に落ちこんでいくような印象がのこる。⁽⁴⁾

旅程は、カンペール、オーディエルヌ、ドゥアルネ、プロゴッフ、ル・ポアントウ・デュ・レとたどる。ブルターニュにジッドは、『感情教育』とゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修養時代』をたずさえて行った。そして、彼の『アラン』と『新感情教育』

に思いをめぐらす。しかし、表現への何か明確にできない不安をのべる。

——私は、思考の翻訳、すなわち表現について深く考えた。私だけのために描くことができたらと思った。デッサンではほとんどなく、色彩だ。それはかつて、けっして描きだされたことのなかったすぐに消えてしまふみかけのもの、多分、それは、再び語ることができないものだからだ。たとえば、水に映る河岸と底の水草が、ぼんやりとまざりあった水のきらめき、または透明な水けむり、この世のものとは思えない影。集められれば現われてくるこれら色彩を描くことができたらと思う。

……描くという考えが、私にしつこくつきまとう。それぞれの光景を表現するとき、私は不安になる。というのも、そこに色彩を見たとしても、直観のように、混合と調和を見出してしまふ。これらは、私たちが伝達不可能だと思う何かを外部に現わすものだ。そのとき、私たちは、それが私たちの魂深くでふるえるのを

感じる⁽¹⁸⁾。

次に色彩についての描写が続く。前掲の色彩論での、非現実的な魂の中でふるえるような自然、色彩が、次の文になると、繊細だが、とても明解で具象的、現実的な自然、色彩が描かれる。

——それらは、ほとんど黒色の岩々の上に、海によって打ち寄せられた海藻の緑、茶、黄の色彩だ。藻には、ところどころ青くきらめき、空がきれぎれに映っている。

それらは、海を見下ろすのがった岩の上の松の幹だ。太陽はすでに低く、後から松の幹を照らしていた。くずれた丘により振れた黒褐色の影が、金色の背景のなかにくっきりと浮き出していた。それらは、アルピニーの水彩画のひどくあられけずりなげしさを持っていた。そして、秋の夕暮れの空によって、そこに三本の櫓の枯木が、落ちた枯葉におおわれた平たい小丘の上に、どっしりと見えた。

それらは、オーディエルヌの近く、港と沖からもどった漁船だ。その帆は下ろされ、そして、マストにそって濡れた網がかかり、ぴんと張っていた。帆は、波しぶきの塩で磨かれ、ほとんど見えないほどの透明になり、広いしわをつくりたれさがっていた。それらは、風により後に遠ざかる風景をかくすことは、ほとんどなかった。そしてそれを風がまい上らせるときには、船全体がうたたねをしているように揺れた。そのときまるで会釈するように、マストの上からしわをつたって海水が漁網の中に流れた⁽¹⁹⁾。

この描写とは逆に、次に非現実的な風景論がでてくる。
——…風景は、私自身から投影され、現われたもの、ふるえつづける私の一部としか私には思えない。
…私は、風景のなかにのみ自分を感じているかのようだ。そして私が、その中心と感ずるのだ。私の来る前には無力だが、内に力を秘めた風景が眠りこけていて、と私とその調和を感じとり徐々にそれを創造して

いった。私は、風景の意識そのものになっていた。

そして、驚ろき入り、この私の夢の庭の中を進んで行った。⁽⁵⁰⁾

にもかかわらず、色彩の、風景の描写は現実的だった。

作者の欲していることと、実際の記述が分離する。あるいは、奇妙な、特異なレアリスムといえるのだろうか。

いずれにしろ、作者は、風景が、彼の夢の中の庭になることを望んでいる。次の一文は、さらに彼の理想と矛盾する。

——(カンペールからクムヌヴァンへ気ままに)……

斜面、そこで草の上で寝ころび、全てを忘れる喜びにのんびりひたっていたと思われる。道、そこで突然栗の木の下で立ちどまる。そこでは、歩いた後で空気がさわやかに見える。そこでは、日影が人を安ませる。そしてそこでは、陽光の中、虫の羽音がかすかに聞こえる。

高い土手のあいだの小道、傾いたハシバミが何か生

生しい神秘をそこにふりそそぐ。

白いかぶりものをした一人の女が見えた。彼女は近づいて来て、一スーをねだり、そして行ってしまおう……彼女は、私の魂の救いのため祈りをたえまなく大声でとなえながら遠ざかって行く。⁽⁵¹⁾

坂で寝ころび、村の女の祈りの歌を聞いている。斜面、小道、女とむしろ具体的で現実的な描写が続くなか、「生生とした神秘がふりそそぐ」という節は、奇異だ。

神秘や夢が、ただ語句として、作者の文を彼の理想の文へと強要しているかのようだ。さらにこの矛盾はつづく。

——もうじき日が暮れる。すでにうす暗くなった教会に入った。床にひざまずき、二人の女が祈っていた。暗がりの中、彼女たちのケープは、まるで闇を照らすかのように、さらに一層白くみえた。おぼろげなうす暗やみ、何か神秘的なものがさまよっていた。……そして何か漠然とした恐れに満たされた後陣の中、祭壇の後に、燭台の金色の光が弱く輝くのがみえる。

ステンドグラスから夕暮れの光がおちてくる。そこで青色の陽が消えかかっている。教会の中、全ては沈黙している。陶酔が一人の女をうっとりさせていた。……私は泣いた。それほど物事の平和は大きかった。⁽⁵²⁾

教会内の具体的描写は、夕暮れ時とはいえ、明確で細密で現実的だ。そこで「神秘なものがさまよう」のはおかしい。単純な感情の動き「泣いた」も、むしろ現実的だ。ついで、作者の理想の表現をくつがえす文がでてくる。

——（マレストロア、クエデオの池）荒地の中にかくれていた陰鬱な池、その土手は低く、さざ波もたてず水は動かない、そよ風が水を軽くふれるにはあまりに閉ざされているから。同様に動かぬ岸辺の変らぬ悲しい鏡。

私は不安で一杯になり坐った。いや、これはある悲しみではなかった。この池は何も知らないのだから。それは、何か悲しみではなかった。それは、何でもな

かったのだ。池は、私の視線の下でも、私の来る前と同じように、無関心のままでいたのだ。だから私は、自分が何らかかわりのないことに気付きだしたのだ。この池の岸辺は、私の魂の感じうるいかなる感情もはぐくみはしない。

池は、私のためにつくられたのではない。私は、意地悪く追い出されている。それは中心としての私を必要などしていないのだ。私なしで、それはあり続ける。それは、無定形な何か、創造されずに存在する物のようであった。いかなる神もここには立ち寄りなかったのだ。不安があまりに強くなったので、この意地悪な自然に追い立てられるかのように、私は逃げだした。⁽⁵³⁾

前掲(50)の理想はくつがえされた。一種の文学表現論を展開するなかで彼はこう述べた。「風景は、私自身から投影され、現われたもの、ふるえつづける私の一部としか思えない……風景のなかにのみ自分を感じているかのようなだ。そして私がその中心と感ずるのだ。……風景が眠りこけている、と私がその調和を感じとり、徐々に

それを創造していった。」

ところがここで、池は、主体を拒否する存在として描かれる。全てが、「私の魂の中の夢」となるはずが、池はそれを拒む。前掲(50)では「私はそれを創造する」が、ここでは池は「創造されずに存在する。」この矛盾はなぜか。あるいは現実が優っていると認識したのか。現実と非現実・夢・神秘とが、常に対立しているようにみえながら、彼の文体の中では、現実が優位にあるようにみえる。非現実が誇張である。その意味ではある創造ともいえようが。

次の文でも、現実的な洗濯する女たちのさわがしさに、突然、秘密めいたものが闖入する。

——ウストウ河の岸边で、洗濯をする女たちがいる。きぬたを打つ音、はじける笑い声。そして河が曲るとき、しなだれる木の枝の下の影に明るい神秘的なものがある、それは深く沈んでいく。⁽⁵⁴⁾

そして、神秘とはかかわりなくロックマリアケルの自

然の美しい描写。

——(ロックマリアケル)これは、輪郭のない水彩画だ。モルビアン湾は、干潮で、海の青と水の緑、青と緑の海藻で織られたような泥の底をみせている。長く丸みをおびるリュスの半島は、遠くまでのび、さらに暗い緑の単調な帯となり、水平線でもどうやら海より高くなっている。やや悲しげな灰色、その灰色の空が色彩をうすめる。

そしてかき養殖場の黒い杭が、底の泥に穴をうがち、海はそれをかわくままにしていたので、色彩は全て青ずんでいた。⁽⁵⁵⁾

「輪郭のない水彩画」と作者自身言うよう、まさしく水彩画を言語で表現している。美しいレアリスムの延長にある表現。

さらに美しく正確な海の描写が続く。

——(モルビアン湾上の船で)風が出てきて、帆をふ

くらませ、船をかたむける。まるで執拗な愛撫のようだ。……

海、はじめは黒い、けれど輝く鼈甲のように紺碧の空が映るので、波の動きで海は青くきらきら輝く。次に、あまねく青緑色になる。そのあいだ空は暗くなっていた。そして海底の泥と水とがまじりあう。

島々が海を周囲から閉じ込めている。人は、湖を航行しているのかと思ってしまう。しかし集まった島々の岸はわかれだし、そして島々の真中から、海のかほそいうでが逃がれていく。でも海は、突然くねって再びいなくなる。⁽⁵⁶⁾

次に続く描写も細密で明確だ。そこには前掲(53)のテーマが再びあらわれる。

——緑色の泥でできた二つの礁のあいだのせまい水路を通過するとき、船はゆっくりと泥の中にはまってしまう。……というの潮がほとんど引いていたから。しぼんだ帆は、帆布のパタパタという音をたてて垂れ

下る。動かずに、私たちは、水がもっと深くなり、船を持ち上げてくれる波を待つ。船底では、まるで接吻の音、くちびるからもれる内密なささやきの音のように、小さな波のさざめきがきこえ、音楽のようだ。すすり泣くような単調な音が、私の夢ごこちの心をゆるする。音は、波のリズムにしたがって波のようにゆれ動く。熱い陽光がとてもしやく愛撫するので、いつまでも続く愛撫の中で、私は気を失ないそうだ。そして愛撫は、全ての上にひろがる。何というすべのない瞬間だ。そのとき、打ち棄てられたモナドは、露のように霧散していく。そのとき、この原因となった波に、ふるえる大気に、人を愛撫する日の光に私は変貌する。そのとき生命の感覚だけが存続し、それはあまりに激しいので、豊かに周囲に満ちあふれ、全ての光をさんさんと照らせ、全ての調和を目覚めさせる。その上にこそ、その愛がいますのだ。

強い風が突然ふき船をもちあげた。すぐに帆はふたたびふくらんでいた。⁽⁵⁷⁾

細緻な描写のなか、官能的な情感が生れ、それにひたるうち、主体が失なわれていき、最後に事物に変貌する。次は、より物が魂を圧する。夕暮れどきの海を見に行く途中、作者は、海におりる谷にあった不気味な洞窟に入り、こわくなりそこから逃げだす。そして海の静けさの前で……

——海は瞑想している。安らいだ魂は、しごくいたみいり、もう物を見つめなかった。⁽⁵⁸⁾

魂は物にひざまずく。自然、事物の存在が優り、主体に恐怖を与える。おびえきった主体、魂は、物にひざまずき、もう「見つめる」こともなくなる。非現実的に対する現実の勝利さえ想起させる。

現実が優位となるのは、次も同様。想像上、読書によるだけの東洋が、現実の緻密な描写のなかで浮かび上る。

——テュディ（ロックテュディ）に着くと、海岸が開ける。これがポンリラベの河だ。船から見える広いぼ

んやりとした河口は、東洋（オリエント）の風景のようだ。

トルコ石色の水の中、海松でおおわれた砂洲が長く続き、てっぺんに濃い緑の花束をつけた細い幹が、光のなかにはっきりうきでている。それは、葉のかすかな芽をつけた細いやしの木と違ってしまふようだ。⁽⁵⁹⁾

「サンタンヌドレの巡礼」と題される紀行のこの部分は、全体から独立しているかのように一八八九年夏、と日付けが入っている。日記や紀行の中に散見する作者の文体表現の理想とは異なる文体で書かれる。明細な現実の描写、そして内容は、後のソチにも通ずる。

なお、サンタンヌドレは、モリビアン（モリビア）のドレから六キロ、十七世紀から巡礼地で有名である。

——……列車が去った後、大通りに、乗合馬車、遊覧乗合馬車の見はるかすの列が大急ぎで通りすぎる。声、歌、ムチの音、石の上を走る車輪の音がする。刺繍をしたチョッキのブルトン男と白いかぶりものをして籠

をもったブルトン女たち。籠からは、ずっと遠くまで食べ物のおいがしている。

馬車の一番高い所に坐り、私は観る。

そこでそれは、おとぎ話の大气、火、地の小さな精の奇妙な夢となる。たいへん昔の絵画にあるとても不思議な旅。でも驚くことなどせずに観る、というのも、それは夢だとわかっているから。見知らぬ土地で皆を楽しませるために、操り人形が動きまわるのを見ているのだ。⁽⁶⁰⁾

ここでの夢は、作者の今までのそれとは違う。明細に記述される現実、それに驚き彼は、夢、操り人形の世界と思うことで、驚きを忘れ観る。まさしくソチの雰囲気でもある。

次は、ソチの雰囲気に加えて、オランダ絵画の雰囲気に満たされる。

——片目、手や腕の不具、白痴、バセドー氏病、水腫症の者たちが、駅からサンタンヌまでずっと、路の両

側、溝の中の土手の上に、積み重ねられた石を背によりかかり坐って、声高に祈りを唱えながら、施し物と祝福を哀願する。

そして彼らは全て、この野外で、彼らの悲惨をさらけみせる。しかし太陽によって、ぼろ着の悲しみは霧散する。もはや人は、絵になる形しかみない。それは、横たわる男の裸の腹、バグパイプの腹に似て、赤く日焼けして、へそのまわりには花飾りのお守りをした腹だ。次に傷、それは皮膚に彩色装飾をつくる。あらわになった潰瘍、それは緋色の花に花開く。⁽⁶¹⁾

すさまじい悲惨な人々がいつも快活に語られている。けっして非現実の夢ではなく、異常であるが現実的でもある。一八八九年夏、と日付けを特定したのは、その現実性の故でもあろう。

次の一文では、作者は客観的に視つめる人となる。

——ミサは野外で行なわれる。野原で、群集はミサを開くのだ。高い壇の上に、祭壇がしつらえられる。小

円柱が支える瓦屋根でおおわれた二つの階段でそこま
で行く。これがラ・スカラ・サンクタ（聖段）だ。階
段の段では、全ての人が跪き、額突き、一段一段、数
珠を爪繰りながら低い声で祈る。

そして登る段ごとに、彼らが上るにつれて、彼らの
熱気はより高まり、陶醉に近づく。幻影が彼らを変貌
させる。彼らは聖域にふれようとしている。彼らはふ
るえる。言い表わしようのない心持よさに酔い、彼ら
は泣く。そして祈りの声は、渾然ととけあう礼拝のな
かにきえてゆく。

次に彼らは、よろめき、陶醉に茫然となり、再び立
ち上る。そして大きく見開られた目は、彼らがそこ
から下りるときには、幻視者のぼんやりとしたまなざ
しとなっている。⁽⁶²⁾

信者は、陶醉と幻想の中にいる。しかし作者は、彼ら
から離れて、彼らを微細に描写している。夢にひたる人
間を、逆に客観的、現実的に観ているのだ。

次の段階では、より現実的な描写。あやしげな宗教品

を売る者たち、いわしを焼いて売る者、巡礼たちが野外
で食事をとるさわぎ、そして昼寝などが具体的に細緻に
語られる。

——教会の中庭では、露店商人が聖人のお守り、数珠
そして肩衣などあやしげな品を売っている。女達は、
蝋燭や聖画を売っている。店小屋の立つ周囲では、売
り買いと口上のひどい喧噪だ。腰をまげて老女たちが
いわしを焼いている。油のたえがたい臭いが周囲にた
だよう。

さて草上では、馬をはずした車の中で、饗宴がもよ
おされている。人々は集まり、持って来た籠から酒び
ん、パテ、アンドウイユを出す。そして話しはずみ、
歌い、笑い、おしあいへしあいする。ついには叫び、
飲むのに疲れて、午の熱さに眠気がきて、男も女もごっ
ちゃになって、椅子の上や溝の中やすすしい馬小屋の
奥で横になる。

他方、ぼろをまとった貧しい人々は、重なりあうよ
うに、頭を古い塀の影にいれ、肩を寄せあい、ぼろぼ

ろの服の中で一緒にころがっている。彼らは、すぐうつる病や、ノミ、シラミ、傷口のむかつくような悪臭にも頓着なく、乾しいわしを食べ、口に腑抜けた笑いをうかべまどろんでいる。⁽⁶³⁾

巡礼は佳境に入り、枢機卿のお出ましとなる。

——日が落ちると、晩鐘が鳴り、教会の扉は大きく開かれる。教会の後陣でつくられた行列は、楽隊を先頭に教会のポーチを埋尽す。

レンヌの枢機卿が通るのを見るため、教会前の広場にむかって、おしあいへしあい群集は、急ぎ走る。枢機卿は、サンリブリウックとヴァンヌの司教二人を従えて、野外で祭式をとり行なうことになる。

この荘厳な一行は進み、群集をかきわけ、彼らを囲む周囲を草上に広げた。かたわらでは、勝利のファンファーレが、ひどく騒がしく、俗っぽく、カドリューのリフレーションまでまじえ鳴りひびく。子供たちはラッパを吹く。他の子供たちは歌い、そして全てを圧する

金管楽器の大音響をひびかせた。

また、聖歌隊の子供たちは、歌いながら香を炊き、その青い煙が、揺れる香炉から、漏れ渦巻きのぼる。

次いで、金糸、銀糸の錦の天蓋の下の厳かな大司教が近づくと、彼の通り路に群集は、まるで彼らの頭の上を祈りの大風がふきわたるかののように、頭を下げる。婦人たちのかぶりものの中から祈りのつぶやきがのぼる。全ての人が祈っているのだ。大司教は、ひれ伏す人々の上に、彼の手で祝福を与えた。⁽⁶⁴⁾

続く文では、「神秘的な」は、文切形の形容になりおおせている。

——そして人々がミサを催し、教会の中では女たちが祈り、貧しい人々が変らず潰瘍を奇蹟の水で洗っているうちに、ぼくは、騒がしさに茫然とし、孤独がほしくなり、野に出て行った。

ヒースと高い松に囲まれたC……の池は、雲の影で真紅色となっている。これは妙なる詩だ。全ては鎮ま

り、風は凧ぎ、まどろむ池は、やがてほとんどさざ波もたてない。

牛が水を飲みに来て、その足が水をかきませ、その周囲に波紋をつけるのは、この時間だ。一人の子供が牛を追っている。

日が落ちた。もう色彩は見えない。水が空から事物へ照らし返し、あらゆる物をおおいつつむ金色の影、色調だけとなる。すでに岸辺は、暗闇のなかで定かではなく、神秘的になっている……夜が谷をおおいつくした。森も暗くなる。月が現われたときに、蛙が泣き出した。⁽⁶⁵⁾

そして、夕暮の教会の内部では……

——教会の中では、一群の人々が祈っている。男性は床石に跪き、女性たちは、ベンチに坐っているか、聖アンヌの祭壇にむかってむらがっている。聖アンヌの前には、銅の盆の上、絶えず蠟燭が燃えている。ステンド・グラスから、まだ少しばかりの明りが落ちてく

る。その色調は、消えゆく黄昏の明りが、ある深い透明さで、まだほんの少しだが透明にした。それも、さらに遠くに消えて失なわれる……次いで、不透明で灰色の色調にほとんど一面かわる。大きく開かれた入口から、夜がゆっくりとやってきて、後陣まで入りこみ、教会の内部の壁にそって流れ、告解場の暗い穴の中を、神秘の影で埋める。女性たちの白いかぶり物が、まるで暗闇が照らしているかのように、さらに一層白くなるようにみえる。次いで広がる闇は、上に流れつづけて、ついにはかぶり物もおおい沈めてしまう。そして、日が消える一方で、蠟燭の焰のまわりに、金色の光背が広がり、四方を照らし、聖遺物箱の銅の上に輝き、列柱を黄色にし、跪くブルターニュの人々のケープの上にやさしい光の輝きをなげかける。内陣の上に円天井から下るランプが揺れている。⁽⁶⁶⁾

あのオランダ絵画、フローベルの作品にも似て、現実の醜悪なものが、克明に記されている。しかし聖なるものと、その醜悪なものが、その基調にあるおおらかな明

るさのもとで、バランスを保っている。それは、夢と現実のあいだでも、現実の方が優っていることで、両者は、ある均衡を保っているかにみうけられる。

最後に、私は、ジャン・ドレー博士の伝記を批判している訳ではない。唯一の精緻な伝記に描かれるジッドの青春を、彼の作品と日記の中で、文体の中でとらえなおそうと思うだけだ。そして、いささかでも、ジッドのありのままの全体像がうかびあがるのを待とうとしている。ジッド自身、この二作品に、後に言及することはほとんどなかった。そして日記一八八九年は公表しなかった。日記には、何も公表を躊躇させるスキャンダルめいたこととはなかった。理由は、やはり若き作者の矛盾に満ちた論理の展開と文体のせいだろうか。

しかし、青春とは、かくも矛盾に満ち、渾然としたものだと、むしろ私は思う。この意味でも、ドレー博士への批判ではなく、このカオスをさらに追い求めるエッセーを続けていきたいと思うだけだ。

〈註〉

- (1) A. Gide: *Si le grain ne meurt* (Folio), p. 10
- (2) 現在では、*ホヰキン・ロスタン* 広場。Les jardins d'André Gide (Chêne), p. 7
- (3) G. Téraube: *Histoire d'Uzès*, p. 165
- (4) A. Gide: *Si le grain ne meurt* (Folio), pp. 10-11
- (5) *Ibid.*, p. 11
- (6) *Ibid.*, p. 13
- (7) *Ibid.*, pp. 13-14
- (8) *Ibid.*, p. 14
- (9) C. Martin: *Gide par lui-même* (Seuil), p. 7
- (10) J. Delay: *Jeunesse d'André Gide* (Gallimard)
- (11) P. Laffille: *André Gide romancier* (Hachette)
- (12) A. Gide: *Si le grain ne meurt* (Folio), p. 217
- (13) *Ibid.*, p. 224
- (14) J. Delay: *Jeunesse d'André Gide, I* (Gallimard), p. 411
- (15) *Ibid.*, p. 411 註
- (16) *Ibid.*, p. 412
- (17) *Ibid.*, p. 412
- (18) *Journal d'André Gide I* (Pléiade 旧版) pp. 799-800
- (19) *Journal d'André Gide I* (Pléiade 新版) p. 45
- (20) *Ibid.*, p. 46
- (21) *Ibid.*, p. 52
- (22) *Ibid.*, p. 55
- (23) *Ibid.*, p. 1359
- (24) *Ibid.*, p. 56

- (25) Ibid., p. 59
- (26) Ibid., pp. 60-61
- (27) Ibid., p. 49, p. 51, p. 56, p. 58, p. 62
- (28) Ibid., p. 63
- (29) Ibid., p. 63
- (30) Ibid., p. 63
- (31) Ibid., p. 64
- (32) Ibid., p. 65
- (33) Ibid., p. 66
- (34) Ibid., p. 67
- (35) Ibid., p. 67
- (36) Ibid., p. 69
- (37) Ibid., p. 70
- (38) Ibid., p. 70
- (39) Ibid., p. 1366
- (40) Ibid., p. 77
- (41) Ibid., pp. 107-108
- (42) Ibid., Feuillet, pp. 107-109
- (43) Ibid., pp. 107-108
- (44) Œuvres Complètes d'André Gide (N. R. F.), tome I,
p. XV
- (45) Si le grain ne meurt (Folio), pp. 242-243
- (46) シャンク・ブスー『フランス・風土と生活』(三修社)
- (47) Œuvres Complètes d'André Gide (N. R. F.), p. 7
- (48) Ibid., pp. 7-8
- (49) Ibid., pp. 8-9
- (50) Ibid., p. 9
- (51) Ibid., p. 10
- (52) Ibid., p. 10
- (53) Ibid., p. 11
- (54) Ibid., p. 12
- (55) Ibid., p. 12
- (56) Ibid., p. 12
- (57) Ibid., p. 12
- (58) Ibid., p. 14
- (59) Ibid., p. 16
- (60) Ibid., pp. 16-17
- (61) Ibid., p. 17
- (62) Ibid., pp. 18-19
- (63) Ibid., p. 19
- (64) Ibid., p. 20
- (65) Ibid., pp. 20-21
- (66) Ibid., pp. 21-23